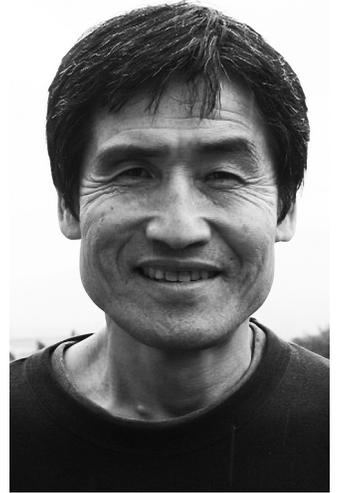


# 一文明のパラダイムシフト

## 「フクシマ・見えない世界への重い扉」

橋本 宙八



マクロビオティックの研究・実践38年。福島県いわき市の山中に居をかまえて簡素な食事で免疫力や自然治癒力を高め、体質を改善する方法を研究、セミナーなどを開催。チェルノブイリの被ばく児童を保養させるなどの活動も行ってきた。震災後も若い母親たちを対象に「食でどう子どもを守るか」等の講演を行う。本紙とは古いつきあいがある。

### 被曝逃避行1000キロ

私の家は、いわき市の北部山間地、原発から24キロ地点にある。この地に住み始めて30年、わずかな地震でも、いつもとっさに気になったのは原発の状況だった。今回の巨大地震では、即座に事故を直感。テレビでその様子を確認してすぐに避難を決意、家族、スタッフ、隣の友人と一緒に村を脱出する。

風向きを考えながらいわき市から西に移動、翌朝、那須に住む友人の家へ。しかし、その日の水素爆発も危険と感じて東京へ向かう。次々と悪化する原発の状況に、さらに遠くへ逃げることを決め、翌日にはアルプスの裏側岐阜へ。結局、その後の余震と原発の状況に追われながら、三重、大阪、四国と約1000キロを避難することになった。

この間、避難を呼びかけた若者数人が合流、合計十数人の大所帯となる。避難をしながら我々が最も神経を注いだのは、今、原発で何が起きているか？今後どうなるのか？と言うことだった。テレビ、新聞、電話、ネットで、夜中もパソコンを開きっぱなしで知ることができた。一体何が真実なのか？と言うことだった。

たまたま縁あって私は、1993年、チェルノブイリの汚染地帯を視察していた。その後、被曝した子どもたちを自宅に招いて保養滞在をさせた経験もあり、原発事故の怖さは十分に知っていた。ひたすら安全を繰り返す政府、東電、報道の発表が、いかに嘘であるかはすぐに見抜くことが出来た。

### 変わらない家への哀しい帰宅

誰もが知りたかった原発の真実。それにまつわる報道は、事故を卑小に見せたいと必死の政府、企業、報道、御用学者と、危険を感じ、その嘘を暴こうとする人間同士の善と悪との闘いだった。嘘か真実の情報か？悪人か善人か？その見分け方は簡単だ。自己の保身や利益を考えた発言か、いのちや他人のことを考えている発言かで、容易に判断出来た。どんなに巧みに取り繕っても、それが、子どもや若者、弱者のいのちを考えていない発言であれば、それはすべて我々にとっては悪人の言葉だった。

自宅を離れて三週間後、原発の状況を見極めながら最初の帰宅をした。我が家は、警戒区域からは外れているために、帰宅は自由に出来た。30年間住み慣れた家は、地震でグシャグシャになった室内を除けば、建物はかるうじて持ちこたえ、風景は震災前と何ら変わらなかった。森に囲まれた庭には沢が流れ、池があり、畑も樹木も以前のままだ。ただ、マスクをし、カップを着て、長靴、手袋で重装備のこちらの姿は、まったく異様だ。目に見えない放射能が、計測器の危険音を鳴り止ませない。このまま自宅に留まることを許してくれない哀しい帰宅だった。

### 放射能の味

かつて、チェルノブイリに行った時に聴いた農民の言葉が忘れられない。1週間、事故を知らされなかった農民は、体でその異変を感じていた。「放射能を被ると、硬貨を舐めた味がする」と彼は言った。

私が感じた異変は、喉にオブラートがまつわりつき、ひっきりなしに唾が吐きたくなるような感覚だった。手足や顔がむくみ、腕一面に発疹が出て無性に痒かった。頭は、まるで孫悟空の金属の輪を被せられたように締め付けられて痛い。いわきを離れた途端に、症状は嘘のように消えたのだから、放射能によるものであることは間違いなかった。

事故後の政府の対応は、すべてが後手だった。どんな事でも、自分たちの保身を優先し責任逃れの言葉ばかり、国民のいのちを助けようとし

ない。ホットスポットが見つかり、住民の危険が明白であっても、移住させるどころか、「そこに居ろ、その地の野菜を食べる、水を飲め！」と強制した。御用学者を派遣して被曝は問題ないと人々を洗脳した。すべてが経済優先、いのち無視のやり方で、子どもや若者を、汚染地帯に押し留めている。救助と言う名の国家犯罪を、手を変え品を変え今でもやり続けているのだ。

### 一億総被曝時代が始まる

原発四機がすべて爆発、崩壊した未曾有の事故がこれから起す悲劇は、勿論、人類未経験のゾーンである。放射能は、破壊された建屋から今でも大気へ、そして、海へと放出され続けている。未だに原発は、爆発の危険性さえ残しているのだ。日本は今後、どこまで汚染されるのだろうか？そして、被曝者の数は？そこから起こる深刻な病気は、どこまで広がるのか？今、言えることは、それは間違いなくやがて来る！ということだ。

チェルノブイリの事故から26年、今でも事故炉の始末は済んでいない。放射能洩れの危険も続いている。汚染された食物で深刻な病気は増加し続けていて、その数は、数十万、数百万とも言われている。チェルノブイリの今は間違いなく日本の近未来の姿である。この歴史の教訓から少しも学ぼうとしない政府と国民。その余りにも楽観的な有様は、哀しくさえある。

政府が安全と言い続けた地域で飼われた牛が汚染されていた。その数は数千頭。すでに全国47都道府県に流通。検査が行き届かない牛乳、豚や鳥や卵の汚染実態は未だに聞こえて来ない。採漁地から遠い港で陸揚げされた魚も、すでに大量に市場に出回っている。国内のすべての野菜、食品を検査することなどは絶対に不可能だ。

内部被曝は、外部被曝よりずっと深刻である。今後、あらゆる食品があらゆる市場から我々の口に入って来る。一億総国民被曝は、間違いなくすでに始まっているのだ。

住民が移住し、無人地帯となったチェルノブイリの汚染地帯は、今、動物の天国だと言う。

←一時帰宅した際に線量計ではかる



興味あるのは、すでに何代にも渡って遺伝子を受け継いだネズミたちが放射能に適應し、異常に元気だそうだ。反対に、鳥は次々に死んでいると言う。それは、鳥が遠方からの飛来で体力を使い果たし、羽を休めた場所で放射能にやられてしまうからなのか？生来、体力の無い日本の子どもたちが、ネズミになれる保証はない。

### 被災の中での嬉しい出来事

汚染時代をどう生き抜くか？すべての日本人の課題である。生活環境を除染する。汚染された食物は口にしない。除染調理を心がける等々、様々な対策が必要だ。中でも、最も大切な生き残り術は、自らの生命力をどう高めるかだ。放射能を浴びても倒れない身体、放射能を身体から排出できる免疫力をどう高めるかにかかっている。

その基本が「食べ物」だ。私たちの身体は、食べ物で出来ている。口から摂り込んだ食を胃腸で消化、吸収し、血液に変え、細胞に取り込んでいる。今、私たち大人が、政府が真っ先にしなければならないのは、未来ある子どもや若者たちをこれ以上被曝させないことだ。そのためにも彼らには、汚染された食べ物を絶対に食べさせてはいけない。

この惨状の中で私たちは、多くの希望も体験した。被災者を助けた数え切れないほどの善意を目撃した。日本人がかつて見せなかった素晴らしい行動や言葉を沢山耳にした。人為を超越した出来事は人間を変える。私もその一人だった。

被災後、私の意識と感情は一変した。悲しいこと、嬉しいこと、人の優しさ、醜さ、何を見てもすぐに涙が出てしまう。沸き起こる感情に蓋をしなくなってしまった。

いのちの危機を前に、これまでこだわっていたものがすべて、何の力も意味も持たないことを身をもって経験した。立派な家も財産も車も、もう要らない。リュック一つあればいい。物欲が自分でも驚くほどなくなった。これは、人生で乗り越えたい大きな課題でもあった。被災して、そうした心境になった人が沢山居ることも聞いた。表大なれば裏もまた大だ。惨状の中にもいいことが一杯あった。素晴らしいことも一杯体験した。きっと、そうした気持ちの人が一杯いることだろう。あり難いことである。

### フクシマはなぜ起きたのか？

今回の災害には二つの顔がある。一つは、地震、津波の自然災害。惨状の中でも多くの希望を見せてくれている岩手、宮城の復興の姿。もう一つは、人災だった原発事故。福島には、汚染された大地と海、失われた自然への悲しみと、被曝した生命の終りの見えない恐怖が残された。原発事故に復興の喜びはない。

原発事故はなぜ起きたのか？言うまでもなくそれは、戦後日本がわき目も振らずに追いかけて来た、豊かな国日本の想定外のゴールだっ

た。国を幸福と平和に導くはずの政治家、官僚、企業人、学者を立派に育てた戦後教育。その哀れな成果が、原発事故の主役たちの姿だった。それは、自らの意思を放棄し、彼らに盲従した自立心無き国民もまた立派に育ててしまった。

未だ確立されない原発の制御技術。その危ない火を、ただ己の欲望を貪るだけの心無き自立心なき輩に、預けてしまった。事故は、起こるべくして起きた事故だった。

原発の崩壊は、わが国が長い間その奥底に潜ませていた善なるもの悪なるもの長所も短所も、柔らかさも硬さも、欲望も自制心も、ありとあらゆる日本的ナルモノのすべてを噴出させた。多くの人がメディアで目撃したその通りだった。

遡れば、その原点は、開国以来、ひたすらわが国が追いかけて来たものでもあった。西欧文化の虜となり、優れた心の文化を捨ててしまった日本人。この災害は、明治から戦後へと近代日本の誤った進路を見事に露呈させた「日本国崩壊の事件」でもあった。



### 文明のパラダイムシフト

第二次世界大戦は、東洋の精神文明を代表する日本と、西洋の物質文明の申し子アメリカが、異なる文明を代表してぶつかり合った戦争でもあった。

戦後、日本は、力とモノを持つ豊かな社会に憧れ、欧米化への道突走った。元来、モノ作りを得意とした日本は、たちまち世界に冠たる消費国家を実現。その象徴都市、東京のエネルギーの釜本が福島の原発だった。

この悲劇の主役は、東西文明に足をかけ、モノとココロを巧みに操り、そのバランスの大切さを身をもって世界に広めることが出来る国でなければならなかった。ヒロシマは、東西の文明を融合させるための重い文明の扉を開いた。フクシマは、現代人が狂奔して止まない消費社会の限界を露呈させ、これからの文明が、生命の大切さやココロを進化させるための世界にならなければならないことをリードしている。

科学は、言うまでもなく、人間の幸福と平和

に寄与するために生まれたものだ。

しかし、その科学が、文明のすべてを破壊する原爆を産み、すべての生命を消滅させる放射能を造り出した。これは、科学の自己矛盾であり、完璧なる自己否定である。

ヒロシマ、フクシマは、共に科学の限界を示し、西洋文明終焉への道を開いた。世界を東洋のココロの文明へと導く、文明のパラダイムシフトなのだ。

### 新しい文明への振鈴

世界は今後、原発の事故を教訓に、ソーラーや風力、バイオマス、地熱発電等の自然エネルギーから、その文明の動力源を手にすることだろう。より生命の深遠なる世界の冒険、バイオテクノロジーなどの自然と調和する技術を探検、開発して行くことだろう。

そして、社会の仕組みや人間の関心も、工業から農業へ、科学から宗教へ、男から女の文化へと、モノの探求から、生命や心などの、より自然と調和した柔らかな生活や生き方、心の豊かさを求める方向へと向かうだろう。

アメリカインディアンのホピ族の神話には、人間が、大地から掘り起こしては行けない金の灰によって危機に陥ることが予言されている。環境を破壊し、モノの文明に溺れてしまった人類が、見えない心の世界、精神文明へと進化しなければならないことが記されている。それがこれから始まる第四の文明であると・・・。

現代は、まさに、このホピの予言にある通り第三の文明期に当たる。アフリカから人類が誕生した文明の第一黎明期、メソポタミアの第二文明から、アジアと西洋の二つの文明が分極し、やがて、それが成長、発展し、第二次世界大戦によって再び遭遇し衝突、その融合から発展した巨大な第三の文明、それが今の文明なのだ。

今、見えない放射能が私たちに教えてくれているものは、モノのいのちの儂さであり、その幻想に執着する人間への警告だ。モノは、心の成長のための胎盤に過ぎない。ホピの言う第四の文明へとは、そうした世界へ人間を進化させるためのステージなのだ。

人間は、文明を創造し、自ら変容、進化する動物である。文明の善も悪も、ことごとくがこの目的のために存在する。

西洋から東洋へ、科学から宗教へ、見えない世界を知るための文明が、人間の魂をより高度に進化させるために、いよいよ長い眠りから覚める。ヒロシマ、フクシマは、精神文明アジアの心を、その深い眠りから揺り起こすための振鈴だったのだ。

### ●マクロビアン Home Page

//www.macrobian.net/

### ●橋本由八ブログ「宙八の無為自然」

//macrobianchuya.blogspot.com/

\*上記HPには半断食セミナーなどの情報も載っています。毎月、各地で開催。